様式 6:終了時活動報告書様式

2023年5月26日

世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業 活動報告書

１．　業務の概要	
（１）事業名	ザンビア共和国「AIDS 孤児のための初等教育及び給食支援」 (通常枠)
（２）実施団体名	特定非営利活動法人　礎の石孤児院
（３）実施期間	2022 年 12 月 1 日～2023 年 4 月 28 日
（４）実施国	ザンビア共和国
（５）活動地域	ザンビア共和国ルサカ州ルサカ県ルサカ市ンゴンベ貧困区

（６）活動概要

①活動の背景：

約 10 年に渡るストリートチルドレン支援の経験から、子ども達が路上生活を始める要因の内、主要な 2 点「家に食べ物がない」「学校に行かせてもらえていない」を支援する事によって、子ども達が路上生活を選ぶ事を抑止し、健やかな成長と、将来的には貧困からの脱却が可能になると、2019 年にスラムにおける初等学校運営を始めた。

学校では現在、ベビークラスから 8 年生(日本の中 2)まで、約 87 人が学んでいる。受け入れ対象児童は、HIV /AIDS によって親を失った、あるいは本人もポジティブで、かつ極度の貧困状態にある孤児を優先させている。

学校では朝食と昼食を提供し、子ども達が空腹に悩まされる事なく、楽しく学べる環境づくりに配慮している。特に HIV ポジティブの子どもにとって『食べさせる事が命を守る事』と認識しており、栄養バランスと健康に注意している。

また、親戚に預けられて生活している孤児たちは、その親戚の経済、婚姻、健康のなどの状況によって、親戚をたらい回しにされるという非常に不安定な生活基盤で生活している。そのため、子どもたちが「安心して、継続して」教育を受け続けるためには、孤児家庭へのエンパワーメントが必要不可欠である。

そこでコミュニティエンパワーメントとして、主に女性を対象とした、①メンタルヘルスケアを実施し、②収入向上を目指して、将来的に技術訓練を始めるための識字教育の実施を予定している。

また、当小学校を卒業した子どもたちが継続して教育を受けていく受け皿とするために、現在中高等学校を建設中である。

②活動の目標：

教育モットーは、“傍観者であってはならない。問題解決を目指し、新しい社会の創造者たれ”であり、子ども達がいずれ、社会のリーダーとして立ち、豊かな社会への成長を牽引するからことを目指す。

２．　業務実施結果

（１）実施した内容

【実施内容①】

初等教育(ベビークラス～8 年生)：

ザンビアのカリキュラムに沿った教育活動を実施。またスクールモットーである“傍観者であってはならない。問題解決を目指し、新しい社会の創造者たれ”の実現を目指したプログラムの一環として、日本のオンラインスタディツアー会社を介した異文化理解のための文化交流授業を定期的に実施したり、国際的な会社の CSR (Corporate Social Responsibility) として、ボランティア社員グループによるオンライン英会話教室を月一回、３～４年生を対象に実施している。

その他、異なる国籍の方々の訪問を受け、「多国籍料理教室」「本の読み聞かせ」「音楽ゲーム」「クリスマス会」等、その時々のプログラムを行った。

【実施内容②】

給食(朝食、昼食)の提供：

開校期間中(月～金)1 日も欠かす事なく提供する事ができた。

【実施内容③】

コミュニティエンパワーメント:

主に女性を対象とした、メンタルヘルスケアを行った。

カウンセリングの際、問題を公で話す事を躊躇する女性がほとんどで、まだグループセッションには至っていない。

また、HIV/AIDS 以外にも、生徒の中には遺伝的疾患を抱えている子達がいる。緊急に入院する必要があるほど症状が悪化する事が複数回あり、交通費、医療費等の支援を行った。

また、母親に精神疾患が発症し、職を失って急激に経済状況が悪化した家庭があったため親戚と連携して残された子どもたちのケアを行ったり、食費や家賃の支援を継続して行った。

生徒の中でも家庭での虐待が疑われたケースがいくつかあり、家庭訪問等の対応をとっている。

【実施内容④】

中高等学校建設プロジェクト：

昨年 8 月より建設が始まっているが、物価の上昇に伴い建設資材が高騰し、見積もりを大幅に上回ったため、現在資金作りをしているところである。来年 1 月には一部開校できる事を目標としている。

（２）実施成果：

【実施内容①】

今年１月から新年度が始まり、新規に受け入れた孤児たちにとっては、少しずつ学校に慣れていく期間として位置づけていた。

スラムの子たちは英語に触れる機会も少なく、ほとんどの子どもが全く話せない状態で入学してくるため、先生たちにとっても現地語から英語に切り替えるタイミングに戸惑っていた様子が昨年見られていた。そのため結局現地語の割合が多くなり、子どもたちの英語能力に向上が見られないクラスが発生していた反省から、今年度は具体的な比重を定め、3 学期までには授業全てを英語で行う事を目標としている。

また、子どもたちの多くが TV もなく、本も読んだことのない環境で生活しているため、識字能力や表現力、想像力を培う機会が乏しかった。幸い本をご寄付で頂けたため、読書の時間を積極的に取り込んでいる。

日本人を含めた、世界中の方々が、当団体の活動に関心を寄せ、訪問して下さり、子どもたちにとっても良い経験となっている。最初の頃は緊張していて上手くコミュニケーションが取れない子たちも多かったが､最近はリラックスして共に楽しめるようになってきている。同様にオンラインで世界を繋ぐ取り組みも継続して行っており、子どもたちはザンビアのスラムにいながらも世界を知り、様々な国籍の人々との交流を楽しんでいる。

【実施内容②】

食事を摂れずに育っていた子どもが、入学して以降少しずつ食欲を取り戻し、しっかりした量を食べれるようになったり、それに伴って元気に走り回って遊ぶようになったりする様子が多く見られた。

勉強は苦手だが、給食を励みに来ている子たちも多く、また親にとっても養育に係る経済的な負担が減ることから、感謝の声が多く聞かれた。

【実施内容③】

カウンセリングのニーズは非常に高く、頻繁に行われているが、公に話すことへの抵抗があり、多くの女性たちが個別の対応を求めている段階である。しかしいずれはグループセッション等が可能な状態にもっていきたい。

子どもたちが､「安心して、継続して学校に通う」ためには、家庭の危機に寄り添そった多様な支援が必要不可欠である。精神面でのサポートの他に、医療費、家賃、食糧等を支援してようやく危機を乗り切り、子どもたちが全員元気に通学する事が可能となった。

【実施内容④】

今年１月までは順調に建設が行われていたが、屋根や外壁までもう少しというところで、資金不足のために一時中断せざるを得なかった。現在資金作りに取り組んでおり、来年 2024 年１月の一部開校を目指している。

（３）得られた教訓など：

支援内容と量が多岐に渡ってきているため、専門性のある、成熟した人材がもっと必要だと改めて痛感している。不合理で非論理的で、かつ時として攻撃的な人々に対峙する時、穏やかに説得できるナショナルスタッフの存在が重要である。

子どもたちは、家庭でどんなに問題が起きていても、自分達から話しに来る事は稀である。

私たちスタッフが子どもたちが発しているサインを察知してアプローチしていかない限り、私たちの知らないところで問題は急速に悪化して手に負えない状態にまでなってしまう。そのため全スタッフが、子どもの表情や、いつもとは違う行動などに気を配り、学校全体で問題に対応していく事が大切である事を認識していく、そのためのスタッフ育成を根気強く行う事が不可欠である。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

今後も継続して学校運営を行なっていく。特に 11 月頃には JICA 海外協力隊員が参加する事になっており、その力を頂きながら様々な取り組みに挑戦していく事を楽しみにしている。

その他（エピソード・感想・写真など）

（１）活動中のエピソード・感想など

2019 年 10 月に開校して以降、スラム内での認知度が年々高まっていて、大きな困難の中にいる多くの家族から、支援をお願いされるようになっている。しかし、事実と異なる事情を作り上げて、子どもを受け入れてもらおうとしたり、賄賂によってスタッフを懐柔しようとするひともおり、そこはナショナルスタッフへの教育と訓練が必要とされるところであった。

昨年度性被害にあった男児が、理科の生殖機能の授業中に突如 PTSD を発症した。現在は落ち着いて生活し、学校にも元気に通学できているが、家庭、クラスメイトたちとも連携して対応できた事は非常に良かった。ザンビアでは近親者による性虐待も非常に多いのだが、家族が見て見ぬふりをしたり、時に被害者である子どもに非を押し付けた結果、その子どもがアルコール、ドラッグ中毒に陥っていったり、自死してしまうケースが多々ある。スラムの大人は、自身も教育を受けた事がなく、お金を要求されがちな警察に通報することを嫌がる（恐れる）ため、学校としてそういった親に寄り添い、複雑な手続きを共に行ない、加害者が法的に処罰されるまで寄り添う姿勢が大切であった。それにより、自分を責めがちな被害者が精神的な平安と安心を得て、大人や社会への信頼を取り戻し、前に向かって進む一助となったと確信している。

（２）活動の写真

オンライン英会話教室の様子

昼食風景

海外からの訪問者による読み聞かせ

韓国の NGO 団体より贈り物を受け取る

建設中の中高等学校（一部）

（３）JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

　ザンビア共和国における学校運営事業では、日本とは異なり１月から新学年が始まる事もあり、基金申請時の計画や予定と状況が変わってしまうという事態が起きた。しかし、JICA 現地事務所の担当者の方が相談に乗って下さり、アドバイスを頂けた事によって、その後変更手続きを速やかに行い、何ら支障なく事業を進める事ができたのは、本当に心強く、有り難かった。非常に感謝している。